

平成二十八年度 入学試験問題

国 語

第一回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから六ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

料理をするということについても考えておこう。ひとは食べずには生きていけない。そして食べるためには、食べるものを作らなければならない。狩猟民や採集民にしても、獲物や採集物を、調理もせずに食べるのはまれであろう。調理は、人間生活におけるもつとも基礎的な行動であることは疑いない。(1) 火がしばしば文明の象徴とされるのも、おそらくそういう理由からであろう。

が、この調理といういとなみに、奇妙なことが起こっている。(ア) ドクシンの人たちにかぎらず、料理をしないひとが増えてきたというのは、(イ) セイカクな数字情報はもっていないが、コンビニエンス・ストアやデパートの地下の食料品売り場、あるいは夜の居酒屋などの風景を見るかぎり、どうもたしかに事実のようである。昼休みともなると、みずから調理したお弁当を開けるひとはさらに少なくなる。ほとんどのひとが社員食堂に行くか、ほかほか弁当を買いに行く。パンやスナック菓子ですませるひとも少なくない。

作らないということは、食事の調理過程を外部に委託するということだ。調理を家の外にだすということ、そのことの意味は、想像以上に大きいように思われる。

たしかに、むかしは調理も公共の場で、たとえば露地の共同炊事場でおこなわれることが多かった。それは戦後の二十年くらいまではふつうの光景だった。その後料理の仕事は「マイホーム」に内部化されたのだが、現在ふたたびその過程が、わたしたちからは見えない場所に移動させられつつある。それは A、かつて排泄が野外や共同便所でなされ、汲み取りもわたしたちの面前でなされていたのに、下水道の完備とともに排泄物処理が見えない過程になったのと同じことである。

それとほぼ並行して、病人の世話が病院へと外部化された。出産や死という、人生でもつともつびきならない瞬間も家庭の外へと去った。家で母親のうめき声を聴くことも、赤ちゃんの嘔きだすような泣き声も聴くことはなくなってしまった。いや、じぶんの身体でさえ、B じぶんでコントロールできず、体調がすぐれないときには、すぐにイインにかけつけるしまつだ。自己治療、相互治療の能力はほぼ枯渇した。その点で、身体はもはやじぶんのものではない。

30

25

20

15

10

5

誕生や病いや死は、人間が (3) でかつ無力な存在であることを思い知らされる出来事である。同じように排泄も、じぶんがほかならぬ自然の一メンバーであることが思い知らされるいとなみである。そういう出来事、そういういとなみが、「戦後」という社会のなかで次々に外部化していった。そして家庭内へのこされたそういう種類の最後のいとなみが、調理だった。ひとは調理の過程で、じぶんが生きたために他のいのちを破壊せざるをえないということ、そのときその生き物は、渾身の力をふりしぼって、抗うということ、身をもつて学んだ。そしてじぶんもまたそういう生き物の一つでしかないということも。そういう体験の場所がいまじわりじわり消えかけている。見えない場所に隠されつつある。このことがわたしたちの現実感覚にあたえる影響は、けつして少なくないと思う。

いのちを潰さないことには、わたしたちが生きていけないということ、このことをしつかり思いださせてくれる行事がある。NHKテレビの「ひるどき日本列島」という番組で紹介していた埼玉県のある村の祭りはその一つだ。

つつじがマンカイになる(オ) キセツに、赤や白のその花を筆りとして、籠いっばいにためる。それを子どもたちが手にもち、大空を仰いで空中に花をふりまく。C、たがいにかけあつて戯れる。ほんとうの花吹雪である。地面が花びらの絨毯と化す、その豪華なこと。

花を引きちぎること、それをあたり一面にぶちまけること。せつかく育てたもののいのちを奪うこと、それを、ふだんは掃いて清めている道に棄てること。フランスのある思想家の言葉をもじって言えば、世界が無秩序に変えられるためにある秩序のように見えてくる。

いずれ食べるために飼育すること、いずれ摘むために栽培すること。これは農牧業というかたちでひとびとがいとなんだできたことだ。せつかくていねいに作りあげたものを壊すというわたしたちの日々のいとなみの構造だけを純粋に析出したのが、この祭りだ。

いのちの深いやりとり、深い(4) 交感。その単純な事実を子どもたちに身をもって味わわせる祭り。あるいは、世界がこのようでもありうるということ、世界は現にあるのとは別のありかた、反対のありかたもしうるということを確認する作業であると言ってもよい。つまり必然と思われたものを偶然に変える作業……。世界をひっくり返すこの(4) 愉悦は、子どもを陶酔のなかに浸す。

60

55

50

45

40

35

わたしたちは日々、獣を殺し、魚を釣り、菜を采って食べている。そしてそれをほんとうにおいしくいただく。ひとつのいのちが別のいのちの火に変わる。肉や魚を切り身にし、透明ラップをかけて売ったりして。

D (先ほども見たように)じぶんたちの誕生や死も、病院というひとの眼に触れない場所で処置するようになった。新生児も遺体もきれいにされ、衣にくるまれてから対面するようになった。

この覆いは残酷さを隠すためのものだろうが、ほんとうは、いのちのやりとりというもつと大事なものを隠してしまっているとは言えないか。

(鷺田清一『悲鳴をあげる身体』)

★枯渴……………つきること。

★渾身……………全身。

★抗う……………反抗する。

★豪奢……………非常にぜいたくではななこと。

★析出……………ここでは分離して取り出すこと。

★交感……………心や感情が通いあうこと。

★愉悦……………楽しみ喜ぶこと。

問一 —(1)「火がしばしば文明の象徴とされる」とありますが、それはなぜですか。二行以内で説明しなさい。

問二 —(2)「想像以上に大きい」とありますが、筆者はどのようなことが問題であると言っているのですか。解答らんに四行以内で説明しなさい。

問三 (3)に入れるのにふさわしい言葉を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 純粋 イ 不純 ウ 有限 エ 自然

問四 —(4)「その単純な事実を子どもたちに身をもって味わわせる」とありますが、具体的には何を通じてどのようなことを「味わわせ」としているのですか。解答らんに合うように五十文字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること。)

《(五十文字以内)生きていけないことを味わわせようとしている。》

問五

A 〃 D に入れるのにふさわしい言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア あるいは イ ちようど ウ それどころか エ もはや

問六

次の一文を文章の適切な部分に戻し、直後の五字を答えなさい。(ただし読点や記号は字数に数えません。)

が、宇宙的とも言つていいこの単純な事実を、わたしたちはふだんひとの眼に触れないようにばかりしている。

問七

—(ア)〃(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ひとが獲物や採集物を調理して食べるようになったために、現代に生きる我々は、文明以前の人間生活が持っていた荒々しい自然の驚異に立ち向かっていくための力強さを失ってしまった。

イ みずから調理したお弁当を持参する代わりに、弁当屋で買ったパンやスナック菓子ですませる人が増えてきたことで、じぶんの身体をコントロールできず、すぐに病院にかかる人が増えた。

ウ かつて排泄が野外や共同便所できれい、汲み取りもわたしたちの面前でなされていたころと違い、下水道が完備されたために、人々は自分の命にも限りがあることを忘れてしまっている。

エ 誕生や病いや死といったのっぴきならぬ瞬間が、見えない場所に隠されつつあるため、他の生物同様に人間も、自然の一員であることを学ぶ機会が徐々に失われていこうとしている。

② 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

中学生の主人公・奏は、母親に美術系の高校に進学することを期待され、美術スクールに通っている。その帰り道、日々の生活に疲れた奏は、深く考えずに特急サンライズ出雲に飛び乗ってしまい、そこで同年代の少年の一馬と出会った。

「……奏さ。あしたになったら、さつさと家、帰れよ」

低くざらつく声に、足をとめられた。

……え？

階段のてすりから見おろすと、一馬はあいかわらず、ふとんにうつぶせになってテレビのほうを向いていた。ゆかたがはだけで、ひざまで見えているけど気にするようすはない。

空耳……のはずないんだけど……？

かと言って、人と話そうとしているようにも思えない。しかたなく、また階段をのぼりだす。

衣擦れとともに、起きあがる気配がした。見おろすと、一馬は、体を横の座卓にあずけて、めんどくさそうにこちらを見あげていた。

「おまえの母親は、『絵を描け』とか、うるさいのかもしれないけどさ。そんなのほっときゃいいじゃん。受験に落ちれば親だって、あーだこーだ言わなくなるんじゃない？ だいたい、美術系の高校なんてさ、俺にはよくわかんねーけど、あれは絵が好きなヤツの行くところだろ？ 親に行かされるよーなどこじゃねーよ」

はだけたゆかたから、あぐらをかいた太ももが丸見えだ。だけど、一馬の瞳は静かに凜いでいる。

「な？ 絵を描くのなんて、やめちゃえよ。そうすれば、家、帰れんだろ？」

絵をやめれば、家に帰れる……？

「それで、おまえは、さつさと帰ったほうがいいよ。だって奏って、一人でこんなところ、ふらふらするようなタイプじゃねえじゃん。おまえさ、一人旅のアブナサ、まったく知らねえだろ？」

やっぱり一馬はわかかってない。わかかってないのに、真剣なふりして、あれこれ人のことに口出さないでほしい。

25

20

15

10

5

「そんなことできないよ……だって私、絵はやめられないもん……」
「はあ？ だから、やめられる方法言ってやってんじゃん。それがどうして、やめられねーんだよっ!!」

「やめられないの！ 絵がなくなったら、私のとりえがなくなっちゃうじゃないっ!!」

息があがった。

ヤダ……私、今、なんて言った……？

階段のとちゆうから、手すりの下を見おろす。

一馬は目を見開いていた。

A 顔が熱くなった。

(1) な、なんでもない！ なんでもないからわすれてっ!!」

バタバタとのこりの階段をのぼって、ロフトの上のベッドに寝ころがる。

はずかしい。自分のとりえが「絵」とか言っちゃって……。

それだって、たいしたとりえじゃないくせにっ!

「待てよ。なんなんだよ、とりえとかって……」

下で、一馬が階段に足をかけた音がした。

とつさにベッドから起きあがる。

私は、ここに一人でいるわけじゃないんだ。男の子といっしょなのに、

気安くベッドに寝ころがるもんじゃない!

ベッドに腰かけて、Tシャツのすそでお腹をかくしていると、階段からのぞいた一馬と目が合った。

「あ……いや……おめーがあんまりおかしなことゆうから……」

一馬はそれ以上のほってこないで、目をそらして背中であぐらに寄りか

かっている。

どうして、ききのがしてくれなかったんだろう……。

私は髪を手ぐしで直しながら、笑顔をつくった。

「だ、だってほら、私ってさ。こんな……女なのに花ないでしょ。でき。背がわりとあるほうだから、運動うまいように見えるらしいんだけど、こ

れがまた、ぜんぜんなの。バスケットかしても、ただ立ってるだけの、ウド

の太木。宮島と出雲大社をこっちゃんにしちゃうほど、地理がダメなだけ

ど、これがね、ほかの教科だって、たいしてよくないんだ。だからさ、と

りえがないんだよ、私って」

「……で、絵はとりえだっての？ おまえの」

「……で、絵はとりえだっての？ おまえの」

55

50

45

40

35

30

「まあ……『少しはほかよりマシかな?』って、程度なんだけど……」

うつむいて、髪をいじくる。ドライヤーをかけたのに、風呂上がりの髪はまだ、奥のほうがぬれている。シヨートの髪だから、指先でのばしてみても、横目でやつと、視線のはじにうつるくらいだ。

「小さいときはさ、絵を描くのが楽しかったんだ。それにね、ほかの教科の成績が悪くても、美術だけはいつも五段階の五でさ。だからね、クラスの文集とかの表紙の絵は、たいてい私にまわってくるの」

(2) 「あ、いるいる。クラスに一人はそ〜ゆ〜ヤツ!」

「そう。クラスに一人くらいはいる程度の絵だったんだ。けっきょく、私の絵は……」

「あ? いや、べつにそ〜ゆ〜……」

なんだかおかしい。一馬が、自分の出した言葉にとまどっている。そういえば、テレビの音もとまっている。一馬は一馬なりに、気をつかって消してくれたのかもしれない。

「いいの。本当にそうだったの。美術スクールに行つて、自分のレベルがよくわかった」

美術スクールの教室にならぶ絵、絵、絵。どの子の絵も晴れやかに胸をはつていた。

その絵を描いている子の中に、かわいい子は何人もいる。勉強のできる子も何人もいる。

私には絵しかない。

なのに、絵も、なくなつちやう……。

「なんだよ。けっきょくおめーは、絵を描くのが好きなわけ? 嫌いなわけ?」

B した。

きのうの美術スクールの講評でも、佐藤先生に同じことをきかれた。

「清水さんは、絵を描くの、好き?」

口ひげとつながった黒いあごひげをいじって。 C 、私の灰色の絵

を見て。

答えられなかった。人からとびぬけた肩を丸めて、うつむいた。

先生に、見捨てられたような気がした。まわりにいる生徒たちからは、ハブられているような、無表情を決めこんだみんなの目の奥で、あざ笑わ

れているような、そんな気がした。

(3) そっちのほうが重かった。何を問いかけられたかなんて、考えられなかった。

私は絵を描くの、好き……?」

「わかんない……」

視界に白いモヤがかかったみたいに、なんにも答えが出てこない。

「はあ?! なんだよそれ?」

一馬は階段で、どしっとヤンキー座りした。背中を手すりにもたれて、

「水におぼれて息できません」とでもいうように、首をそり返らせる。

「つーかさ〜……おまえさ〜……」

栗色の前髪が前にもどつてきたとき、するどい目が私をにらんでいた。

(4) 「ぬるいんだよ」

「……え?」

「親が絵を描かせる」とか言つてつけど、それつてもともと、おまえが絵を描くの得意だったからなんじゃね〜の? 親なりにおめ〜に協力しよう

としてんじゃない。で、おめ〜が絵を好きだと、少なくとも親は思つてる。い〜じゃね〜か。好きなことやらせてくれるんだから。親、やさしいじゃ

ん! そんな親なら、おめ〜が『やめる』つて言や、やめさせてくれるんじゃないね?」

「ムリだよ……そんなこと私が言いだしたら、お母さん……」

どんなに怒るかわからない。「あなたの美術スクール代にどれだけ投資してると思つてるの?」「お母さんなんて、アーティストになりたくても、親に

させてもらえなかったのよ!」

でもきつと、最後には、骨ばつた小さな肩を落としてふさぎこんでしま

う。

私が「アーティスト」になれるかもつて、期待しているお母さん。普段は小

言ばかりなのに、そのことを語るときだけは、夢見る少女にもどつてしま

うお母さん。

「とか、なんとか言つて、自分に言う勇気がね〜だけだろ?」

あたたかい穴ぐらに逃げこもうとしていた私に、言葉のやりは先回りし

て飛んできた。

道はふさがれた。

「好きならさつさと帰つて、絵を描きゃいい。嫌いなら親に『やめる』つて

言やいい。すげーかんたんじゃねーか!! おめーが何悩んでんのか、こっちはぜんぜんわかんねーよ!!」

(5) かんたんじゃない。
だって、わかんないんだから。本当に、本当に、絵が好きなのか、わかんないんだから。

美術スクールに通う前、白い紙は、何も描いていないうちから、あかるく華やかに見えた。紙は、これから塗りたい色たちであふれていた。

だけど、美術スクールの(6)木炭のカスが充満する部屋では、白い紙まで灰色にくすんでいて、ほかの色なんてうかんでこない。紙に木炭をのせはじめると、忍耐、忍耐、忍耐の時間が、腕時計の秒針を **D** 動かしていく。

あんなに苦しいことが、絵を描くことなの？

目頭が熱くなってくる。

宮島まで来てるのに、絵のことなんか考えさせないでよっ!

(ひろのみずえ『いつまでもここでキミを待つ』)

問一

——(1)「な、なんでもない! なんでもないからわすれてっ!」とありますが、なぜ奏はこのように言ったのですか。三行以内で説明しなさい。

問二

——(2)「一馬の言葉が胸をさした。」とありますが、どういうことですか。解答らんに二行以内で具体的に説明しなさい。

問三

——(3)「そっちのほうが重かった。」とありますが、このときの奏の心情の説明としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア とびぬけた才能を持っているはずなのに、灰色の絵ばかり描かなければならないことに言いようのない不満を感じた。

イ 突然絵が好きか聞かれても、頭が真っ白になってしまい何も答えが出てこず、水におぼれそうになっているように感じた。

ウ 絵が好きだと即答できなかったせいで、先生を失望させ、まわりの生徒たちから軽蔑され、のけ者にされているように感じた。

エ 言葉の意味が理解できず、佐藤先生には見捨てられ、まわりにいる生徒たちにあざ笑われているように感じた。

問四

——(4)「ぬるいんだよ」とありますが、一馬が言いたいのはどういうことですか。三行以内で説明しなさい。

問五

——(5)「かんたんじゃない。」とありますが、このときの奏の心情を解答らんに二行以内で具体的に説明しなさい。

問六

A **D** に入れるのにふさわしい言葉を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ビクつと イ じつと ウ ちまちまと エ カアツと

問七

——(6)「木炭」とありますが、「木」など植物を使った次の一〜五のことわざの意味を後の「意味」ア〜オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 木を見て森を見ず
- 二 花より団子
- 三 火中の栗を拾う
- 四 どんぐりの背くらべ
- 五 まかぬ種は生えぬ

【意味】

ア 小さいことにとらわれて、全体を見ていない。

イ どれも同じくらいで、とびぬけてすぐれたものがない。

ウ 自分からわざわざ危険なことをする。

エ 外見だけのものより、実際に役に立つもののほうがいい。

オ 何もしないで、よい結果だけを期待してもむだだ。

問八

本文の内容に合うものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 奏の母親は、自分と同じように奏も絵の才能があると考えており、奏には何としても美術系の高校に合格してもらいたいと考えている。

イ 美術スクールの佐藤先生は、絵を描くことに夢中になることができている奏には、美術系の高校は無理だと考えている。

ウ 一馬は、母親に期待され、好きなことをさせてもらっている奏のことがうらやましく目ざわりで、早く帰ってほしいと思っている。

エ 奏は、美術スクールの周りの生徒の絵を目の当たりにして、特技だと思っていた絵に対しても自信を持つことができなくなっている。